々」、さらには「具体的」とか「くわしく」とかいった意味も派生したものといえはしないであろうか。こう考えることが許されるならば、「つぶさに」「つぶらに」も語源的に「粒さに」「粒らに」が想定でき、「粒のごとくいちいち、こまごま」の意の由来がよく理解されるようである。これはいうまでもなく、(ハ)に属する用例より考えられる。また、「ぶつぶついう」とかさらに「不平をもらす」の意も、ぽつぽつと連続的にいうのであるから、「粒々」の擬態的用法の一つと見てよいのではなかろうか。最後の(ホ)は涙滴の落ちる様の形容であるから、涙の水滴が目より流れ出る時や頬を伝う時に誰しもが感じまた見られる様子を、表現したものと解してよいであろう。(ロ)の動悸の場合も、胸中に小さい玉があってそれがしきりに動きつづけるような実感——心臓の鼓動——、あるいは、ある間隔をおいて打つ形容と考えられよう。

このように「つぶ〳〵と」いう語は「粒」から来た擬態語であり、さらに「具体的」という意を派生したものといえるであろう。

かげろふの日記の三例の場合は、この源氏物語において帰納した(イ)より(ホ)までの五要素には比べるべくもないが、(ト)の「つぶつぶと言ひ知らするものにもがな」は、「具さに」の意で、源氏物語の用例から帰納したところによると(ハ)に相当し、(ニ)の「つぶつぶと涙ぞ落つる」は(ホ)であり、(ヘ)の「胸つぶつぶとはしるに」は動悸を形容しているのであるから、(ロ)の場合であって、丸々と肥えた肉体の形容は、本日記にそういう場面が見られないところからその用例も見当らない。

注※1　なお、宿木に、「心のうちのくるしきまでなりゆくさまをつく〳〵と（別本中桃園文庫蔵本及び湖月抄本つふ〳〵と）いひつゝけ給て」（源氏物語大成一七三九頁）というのがあるが、今は省くこととする。

——三二・三・一五、三四・七・三〇小補——

かげろふの日記の本文は疑問なところが多い。従って語彙についての考察もよほど慎重でなければならない。ここに取扱った小考は、本日記に見える擬声語副詞についての片々たる報告の一部に過ぎないが、一往朝日新聞社の日本古典全書本によりながらも、玉上琢弥・柿本奨両氏の御厚意による宮内庁本、山脇毅博士の御厚意による博士御所蔵古写本、また架蔵の元禄十年刊本などの筆跡を比較参考しながら進めることができた。貴重な資料を貸与下さった御厚意に対し深く感謝する次第である。

また終始御指導賜った清水泰先生・宮嶋弘先生・田中重太郎先生に対して厚くお礼申しあげる。

古典解釈のための助詞の整理

長田久男

はじめに

左の「整理表」を説明することが、本稿の目的である。つぎの三点をあきらかにすることを目標に説明したい。

1　整理の構想と整理の基準について。
2　整理の構想及び整理の基準と古典解釈との関係。
3　整理表と通用の文法書の助詞分類との関連。

古典解釈のための助詞の整理表

位置	接続	外にあらわれた特徴	働き（第一類）文の性質を変える	働き（第二類）文節の任務を示す	働き（第三類）表現者の気持を示す	法文分類の通用の書で
(甲)文末だけに用いられる助詞	未然形に—	何に続いて行くか。何と呼応するか。	→ばや・なむ・な①・ね・な…そ・			終助詞
	連用形に—					
	終止形に—		→な②・			
	Ⓐ接続が定まっている（イ）活用語につく					
	Ⓑ接続が定まっていない（ロ）「も」「し」につく		→が・がな		→か・かな・かも・かし・な③	

整理の構想

助詞は、いずれも語形が小さい。一音節・二音節のものがほとんどである。それでいて、その働きは多種多様である。しかも、助詞だけ吟味しても、その働きを、正しくとらえるのが困難である。「文」の一部として、あるいは、「場面」の中で、吟味しなければならない場合が多い。つまり、ある助詞の働きを理解することは、その「文」の意味を理解することである場合が多い。

古典の解釈作業の中で、「文」を理解することが一つの重要な作業段階であり、「文」を理解するための前の段階の一作業として、助詞の働きを理解したいという場合、「文」が理解されなければ、助詞が理解されないというのでは、作業としては、およそ、逆である。助詞を理解する時と、「文」を理解する時とが、仮に、時間的には、同時であるとしても、方法的には、「文」を理解するために

助詞を理解するという考え方をとりたい。これが、「古典解釈のための助詞の整理」[1]の構想の出発点である。

時枝博士は、「古典の読解や鑑賞は、いわば、臨床医学のようなものである。」[2]といわれた。外にあらわれた特徴から、内部の働きを見当ずけていくことの必要を言われたものと思う。助詞の整理も、そうした方向にそうて試みたい。外にあらわれた特徴を三つの基準を用いて整理し、助詞の働きを、読解作業との関係から三分類し、両者を関連ずけたのが右の整理表である。

助詞の用いられる位置　—第一整理基準—

助詞は、用いられる位置によると、つぎのように三分類される。

(甲)文末だけに用いられる助詞。
(乙)文の途中だけに用いられる助詞。
(丙)文末・文の中のどちらにも用いられる助詞。

例文

(甲)○うれしくものたまふものかな。　(竹取物語)
(乙)野山にまじりて　竹を取りつつよろづのことにつかひけり。　(竹取物語)
(丙)いづれの山か天に近き。　(竹取物語)
紀伊の守の妹もこなたにあるか。　(源氏・空蟬)

通用の文法書の分類によれば、(甲)に所属する助詞は、「終助詞」の全部である。(乙)に所属する助詞は、「接続助詞」「格助詞」「副助詞」の全部である。(丙)に所属する助詞は、「係助詞」「間投助詞」の全部である。

(甲)(乙)は、用いられる位置が、常に一定しているのに対し、(丙)は、文末と文の途中の両方に用いられる可能性をもっているので具体例になると、その認定は、困難である。つまり、具体的な一つの表現では、文末に用いられているか、文の途中に用いられているかのどちらかである。そのため、

○紀伊の守の妹もこなたにあるか。　(源氏・空蟬)

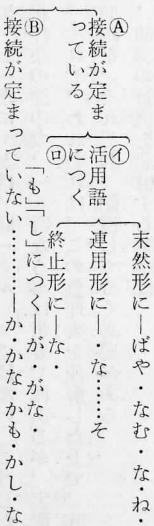
のように、文末に用いられている場合は、(甲)との区別が、困難である。また、

○いづれの山か天に近き。　(竹取物語)

のように、文の中に用いられている場合は、(乙)との区別が困難である。したがって、作業を容易にするためには、まず、(丙)に所属する語例を記憶する必要がある。

助詞の接続　—第二整理基準

助詞は、必ず、他の語の下について用いられる。接続が定まっているものと、定まっていないものとでは、その働きに大きな違いがある。また、接続が定まっているものの中でも、どういう語につくかということと、その働きとには、連関がある。つぎのように整理される。



（乙）
文の途中だけに用いられる
Ⓐ接続が定まっている
Ⓑ接続が定まっていない……だに・すら・さへ・のみ・ばかり・まで・など・し・から・にて・より・と・とて・を・に・へ
Ⓐ活用語につく
未然形に—ば・で・と（形）とも
連用形に—て・して・つつ・ながら・
終止形に—と・とも・が・に・を・ものの
連体形に—・ものから・ものゆゑ・ものを・
Ⓑ体言及び体言に準ずるものにつく
已然形に—ば・ど・ども・が・の・を・に・へ

（丙）
文末・文の途中のどちらにも用いられる
Ⓑ接続が定まっていない
や・か・ぞ・なむ・こそ・は・も・よ・を・や・

Ⓑに所属する助詞、即ち、接続が定まっていない助詞は、いろいろ違った接続をする可能性をもっている。だから、抽象的には、ⒶとⒷとの区別は容易であっても、実際の作業となると、Ⓑが Ⓐと全く同じ接続のしかたをしている場合など、その表現を一見しただけでは、区別は困難な場合が多い。

たとえば、

Ⓐ かた時とのたまふに怪しくなりぬ。（竹取物語）

Ⓑ 雪とのみ降るだにあるを桜花いかに散れとか風の吹くらん。（古今集、二）

右の場合、「に」と「だに」とは、接続のしかたは全く同じである。したがって、一見、同じグループの助詞のように思われる。しかし、

○のぼらむをだに見送りたまへ。（竹取物語）

と、他の例によって、「だに」は、違った接続をもすることがわかるので、「に」と「だに」とは、同一グループではない。こうした吟味を、解釈作業の途中で、一々行なう事は重要ではあるが、実際的ではない。それで、われわれは、この整理表を理解した上で、Ⓑに所属する助詞を、それぞれ、記憶しておく必要がある。

ついでに、助詞の語例を記憶する順序は、

1 （丙）に所属する助詞、即ち、「係助詞」と「間投助詞」

2 （甲）のⒷと（乙）のⒷに所属する助詞、即ち、「終助詞」の一部と、「副助詞」

とするのが、作業としてはよい。

何に続いて行くか。何と呼応するか。
—第三整理基準—

第二整理基準の「接続」の項では、助詞の前の語を問題にしたのに対し、ここでは、助詞（助詞に統一された文節）が、どこに続いて行くか、あるいは、どこと呼応するかということを基準にしようとしたものである。ただ、この基準は、すでに、助詞の働きの分野に一歩はいっていて、厳密には、「外にあらわれた特徴」とは言いがたい。また、この基準によって、整理されるものは、（乙）（丙）に所属するものに限られ、しかも、かろうじて、（乙）のⒶの㋺と、（丙）のⒷとを分類することができるだけである。このように整理は全般には及ばないが、整理される（乙）のⒶの㋺と（丙）のⒷでは必要な整理である。

例文

（乙）のⒶの㋺

○野山にまじりて竹を取りつつよろづのことにつかひけり。

（竹取物語）

「野山に」は「まじり」という「用言」に続いていく。「竹を」は「取り」という「用言」に続いていく。「よろづの」は「こと」という「体言」に続いていく。

○手のわろき人のはばからず文書きちらすはよし。（徒然草）

「手の」は「わろき」という「述語」に続いていく。「人の」は、「書きちらす」という「述語」に続いていく。

（丙）のⒷ

○何事も入りたたぬさましたるぞよき。（徒然草七九段）

「ぞ」は、「よし」の連体形の「よき」と呼応している。

すなわち、（乙）のⒶの㋺では、いわゆる「格助詞」の中を、「連体格助詞」「主格助詞」「連用格助詞」に三分類し、（丙）のⒷでは、いわゆる「係助詞」と「間投助詞」とを区別する。

助詞の働き —整理の終点—解釈の出発点。

助詞の働きは多種多様である。それを、今日の文法書では、「助詞の用法」という標題のもとに各々の語について、かなり多くの例をあげているのが普通である。示している用法は、その助詞のいわゆる解釈を、多くの例文から帰納し、整理して示したものであると考えられる。したがって、文法書の「助詞の用法」を、充分、理解し、記憶している場合は、「文」もしくは、「場面」の理解は、たしかに容易である。すでに、多くの古典から帰納して得たはずの用法を、当面の問題文に対比して、どの用法かを見当ずけることになるからである。ところが、この考え方には、二つの問題点がある。

一つは、文法書に示している用法を、それぞれ語ごとに、充分、理解し、記憶することが、学習としては、そう容易ではないということである。その二は、示されている用法で、読解しようとする問題文の用法を見当ずけようとする場合、どうも、すっきりと適当しない例がかなり多いことである。この両者は、学習心理としては、相互に関係する場合が多い。せっかく理解し記憶した、ある助詞の用法が、具体的な古典を解釈するときに、適当しない場合が多いと、つぎの語の用法を理解し、記憶する意欲を失なって行く。助詞の用法を理解し記憶していないために、古典の解釈がうまく行かない。こうして、悪循環が続く結果となる。

さて、「文」の理解、もしくは、「場面」の理解のために、助詞の働きを手がかりとしようとする本稿の場合は、助詞の働きを、大きく三つに分類したい。

第一類、文の性質を変える助詞。

第二類、文節の任務を示す助詞。

第三類、表現者の気持を示す助詞。

例文、

第一類、

○あやまちすな。心して下りよ。（徒然草）

「な」を除くと、平叙文、「な」がつくと、禁止文となる。

○今年より春知りそむる桜花散るといふことは習はざらなむ。（古今集）

「なむ」を除くと、平叙文（打消）「なむ」がつくと、希望文となる。

○いづれの山か天に近き。　（竹取物語）

「か」を除くと、平叙文、「か」がつくと、疑問文となる。

第二類

○野山に　まじりて　竹を　取りつつ　よろづの　ことに　つかひけり。　（竹取物語）

「野山に」は「まじりて」に続く。その場合、「続く力」は「に」にある。以下図解するとつぎのようになる。「まじりて」→「取りつつ」。「竹を」→「取りつつ」。「取りつつ」→「つかひけり」。「よろづの」→「ことに」。「ことに」→「つかひけり」。

第三類、

○家の人どもに、①物をだに②言はむとて、いひかくれども事ともせず。　（竹取物語）

文節①は、②に続く。右の場合、「続く力」は、「を」にあって、「だに」にはない。「だに」は、「続く力」をもっていないかわりに、表現者の気持（セメテ／物ヲ／ダケデモ……）を示している。

○名をば讃岐造となむいひける。　（竹取物語）

「名をば」は「いひける」に続く。その場合、「続く力」は「を」にあって、「ば」にはない。「ば」は「は」と同じで、「続く力」をもっていないかわりに、強調しようという表現者の気持を示している。「讃岐造となむ」は「いひける」に続く。その場合、「続く力」は、「と」で示し、「なむ」は、強調しようという表現者の気持を示している。

○うれしくものたまふものかな。　（竹取物語）

「かな」がある場合、「ウレシクモオッシャルコトヨ。」となり、「かな」がない場合は「ウレシクモオッシャルコト。」となり、「文」の性質は変わらない。「ヨ」という表現者の気持が加わるか加わらないかの違いである。つまり「かな」は、表現者の感動を示している。

さて、以上の助詞の働きを、先に、第一から第三までの基準によって整理したものと、関連ずけると、はじめにあげた整理表のようにまとめられる。

われわれは、まず、いわば、客観的にとらえることの比較的、容易なことがら、即ち、「位置」「接続」「その他」という「外にあらわれた特徴」と、右のような特徴をもつグループの助詞に共通した「働き」との関係を理解し記憶しておくことを、最小限の知識としたい。そして、つぎに、これらの知識を、解釈の出発点として、多種多様な、具体的表現に応じて解釈を進めたい。この後段の作業で、今日、文法書に示されている「助詞の用法」を参考にしたい。その場合、「助詞の用法」を記憶することは、その必要と立場とが明確であるから記憶することの無意味を云々する心配はない。そういう意味でも、この整理表が、通用の文法書での助詞の分類の「格助詞・接続助詞・副助詞・係助詞・終助詞・間投助詞」と、つながりをもっていることは、意義があり、都合がよい。

注①　高等学校での古典の学習指導の場合を考えての整理である。

②　時枝誠記「古典解釈のための日本文法」初版のはしがき。

初版「赤光」における茂吉の一用語

小嶋孝三郎

一

初版「赤光」中の秀歌に数えられる一つに、

雪のなかに日の落つる見ゆほのぼのと懺悔（さんげ）の心かなしかれども　（大正二年作）

がある。右にみられる「ほのぼのと」いう用語は一応注目すべき用法であり、種々の点で考察すべき問題を含んでいる。というのは、この副詞が常にどのような意味に用いられているかというような云わば語義解釈上の問題だけではなしに、ここでは寧ろこの語の語性とも関連して頗る興味ある問題を含んでいるのである。

大体、「ほのぼの―」という語は副詞に属し、「ほんのりと」「ぼんやりと」「ほのかに」「かすかに」等々の意をもついわゆる状態副詞とみられる。しかしながら、同じ状態副詞の中でも、「ほろほろ―」「はらはら―」「ぴかぴか―」等のようないわゆる「擬声語」（擬音語）や「擬態語」（擬容語）と異なる。そのことは、形態的にみて、これが二音節反復の畳語でありながら、そこにいわゆる「連濁」がある点にも見られる。「連濁」というのは、通常二語が複合して一語を成す場合、又は同一語を反復して畳語を造る場合、下に来る語の語頭音が濁音を生じること（無声音の有声音化）をいう。例えば「猿」と「知恵」とが一つになって「猿知恵」即ちこの場合「ち」の音が「ぢ」となる。「月」「時」を反復すると「つきづき」「ときどき」となり、下の「つ」「と」がそれぞれ「づ」「ど」というように連濁を生じている。「高し」「遥かなり」等の語幹（語根）を反復すると「たかだか」「はるばる」となる。これらの語から類推すると、「ほのぼの―」という語は語原的に「ほのに」「ほのかに」「仄かなり」その他「仄見ゆ」「仄聞く」「仄めく」「仄めかす」「仄暗し」等々にみられる語根「ほの」を反復して成語した畳語であろう。

ところで、初版「赤光」中「ほのぼの―」を用いた歌をあげると次のようなものがある。まず最も古い例では、明治四十二年作の二首がある。

1．さみだれはきのふより降り行々子（よしまり）をほのぼのやさしく聞く今宵かも　（折に触れて）

2．やまひ去り嬉しみ居ればほのぼのに心ぐけくもなりて来るかも　（細り身）